# コルヴォ トランクィラ

アルード・レナウス

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

残された最後の鴉よ、再び空の王者となれ。

# 目次

ラストレイヴン ―――― 1
鴉の目覚め ―――― 8

# ラストレイヴン

イジツに存在する幾多もの街の一つ、ラハマ。
そこはかの有名なコトブキ飛行隊の始まりの地でもある。
イケスカ動乱終結からまだ間も無いが事態は収束に向かっており、平穏を取り戻したラハマの街中は人々が行き交い、平穏を享受していた。
コトブキ飛行隊のとてそれは同じである。
しかし、羽衣丸の喪失はオウニ商会だけでなく彼女らにとってもかなりの痛手だったらしく、活動領域は以前より随分と狭まってしまった。
平穏を享受しつつもいつまでもやってこない仕事に焦りを覚え、行動を開始し、なんとかラハマでの働き先を見つける事が出来た。
空を飛び、数々の敵を撃ち落としてきた彼女らはそれ以外に特にやっていた事は無く、結局アルバイトという身分で働く事になっていた。
僅かな賃金だが、こうして働けるだけでもこのイジツでは充分有難い。
今のイジツの情勢は最早就職氷河期を通り越した何かだ。
ラハマはまだ少ない方だが、遠くの街に行けばきっと路上は汚い乞食と草臥れた服装

に絶望に満ちた表情でうろつき回る失業者で溢れ返っている事だろう。
そんな救いようの無い世界で彼らは弱者を見下ろしながらまだ自分は大丈夫だと安堵するのだ。
勿論、そんな意図が無い者がいるのは当たり前だ。
図書館で慌ただしく歩き回っているこの溌剌とした少女達もそんな事をする程落ちぶれてはいない。
キリエとチカ。　それが少女達の名前だった。
図書館にいるからと言って司書の仕事をしている訳では無い。
毎日が喧嘩になる彼女等ではそもそも話にならないだろう。
その代わりではないが、館内の掃除を任されていた。
「ちょっとチカサボんないでよ！」
「こっちはもう終わったもんね～」
「うっそだぁ！」
嘘だろうと思って来てみれば、余程キリエを見下したかったのかチカに任されていた場所は確かに先程より綺麗になっていた。
「ね？」
たった一文字。　それに言い返す事も出来ないキリエは下唇を噛み締めながらぐぬ

ぬと唸る。
その時だった、外から聞こてえてくる謎の音を聞いたのは。
館内にいる人々も何事かと窓際に集まり、空を見上げた。
人々の視線の先にいたのは一機の航空機。
彼等の知識の範囲内で言えばあれは戦闘機だ。
しかしその姿は異常だった。
エンジンは黒煙を吐き、胴体や翼の各所に穴が開き、そこから燃料が漏れだしている。
尋常ではないその姿に暫時呆けていた二人は掃除道具を放り出し、外へと向かった。
一方であの戦闘機の中の様子はといえば無線機からひっきりなしにここの自警団員の声が響いていた。
《おい!その先は市街地だ!!直ぐに進路を変更しろ!!死にてえのかてめえ!!》
自警団員の声は聞こえどもそれに反応するパイロットの声は一向に聞こえてこない。
大破した戦闘機は徐々に高度が下がり、豆粒大だった市街地がすぐ目下に映っていた。
パイロットは進路変更どころか操縦桿を握る手が動いていない。
彼は文字通り生と死の狭間を彷徨っている最中だったのだ。
《おい!!聞こえてんのか!?応答しろ!!おい!!》

意識の朦朧とする中で無線に答える事は出来ず、ただ今にも失いそうな意識を保ち続ける事が彼の出来る唯一の行動。

もういつ機体と地面が接触してもおかしくない距離で戦闘機は漸くランディングギアを展開した。

だが遅すぎた。

展開が間に合わず、展開途中で接地したランディングギアは自重に耐えられずに折れ、胴体を地面に擦り付け、粉塵を発生させながら数百メートル先の道路で漸く停止した。

幸いなのは市街地に直撃しなかったのと胴体着陸の衝撃で機体が崩壊しなかった事だ。

煙を上げながら横たえる戦闘機の傍に野次馬が集まり、取り囲む。

その野次馬の間に割り込んで戦闘機に近寄った人が二人いた。

キリエとチカだ。

彼女の性格なのかそれとも用心棒としての本質なのかは分からないが、キャノピーが開き、コックピットから男が引き出された。

着陸した頃からなのか、男は既に意識を失っていた。

◇◆◇◆◇◆◇

深い眠りから目が覚めればそこは病室。
見覚えの無い景色に男は僅かに首を傾げ、自分の身なりを確認すると患者服を着ていた。
それと体のあちこちに包帯やらガーゼが施されており、治療は既に済んでいたらしい。
あのような重傷を負ってよく生きてこれたと我ながら感心する。
暫くどうしようかと状況の整理を行っていると病室のドアがノックされた。
入ってきたのは見知らぬ中年の男一人とこれまた見知らぬ少女二人だ。
暫定的にこの内の誰か、もしくは全員が自分を助けたと見て特に警戒はせずに三人の方へと顔を向けた。
「その様子だと大丈夫みたいだな」
男は安心したような声を出すとベッドの脇にあった椅子に腰掛け、改めて彼に向き直った。
所々皺が目立つ顔にカジュアルな服装。
年齢的には四十代後半といった所か。
素早く男を分析している間に話が始まった。
「お前を助けたのはコイツら二人だ」

そう言いながら男は後ろにいた少女二人を指さす。
助けてくれた人が分かって彼は感謝の気持ちを伝えたかったが、彼にはそれが出来なかった。
感謝の言葉が出ない彼に対して彼女達は少し怒ってしまったのかむっとした表情になった。
男も溜息をつきつつ礼は言っておけと促された。
「お前がどういう境遇の人間か知らねえがコイツらはあんまり怒らせない方がいいぜ」
「え……あ…う……」
「なんだ言葉の一つも出ねえのか？」
「あ、え……あ」
この明らかに不審な様子に男は一つの確信を持った。
「……まさか……お前喋れないのか？」
「……う」
小さく頷いた彼を見て男は更に大きな溜息をつく。
仕方が無いからと懐から手帳とペンを取り出し、彼に手渡した。
「お前の名前をまずは教えてくれ」
手帳とペンを受け取り、真っ白なページになるべく大きめの字で自分の名前を書いて

男に返した。
しかし、手帳の中身を見た男は首を傾げるだけで書いてある事を理解している様子は無かった。
「なぁ、これなんて書いてあるか分からねえぞ。　どこの言葉だ？」
「これユーハング語じゃない？」
「昔サブ爺の所で見た事があるけどこんなヒョロヒョロした文字じゃなかったよ」
彼は自分の故郷の言葉で書いたのだが、どうやらやはり理解してくれなかったようだ。
想定はしていたが喋る事も出来ず、他に良い手段も思い付かないので参ってしまった。
どうするべきか悩んでいたその時に、またもやドアがノックされ、今度は四人の女性が入ってきた。
この部屋の男女比率のおかしさを感じつつも視線を男からドアの方へ移した。
「貴方が先程の戦闘機のパイロットか。　私はレオナだ」
状況の説明には、きっととても苦労する事だろう。

# 鴉の目覚め

思った通り、四人に正確な情報を伝える事は難しかった。
そもそもこっちは喋れないのであの男に代わりに言ってもらう他ない。
自己紹介も済んでここにいる全員の名は大体覚えた。
朱色の髪の人がレオナ。
金髪でお嬢様っぽいのがエンマ。
温厚そうなのがザラ。
無表情で賢そうなのがケイト。
一番背が小さくて活発なのがチカ。
そして見慣れた飛行帽を被ってるのがキリエ。
男はここ、ラハマという街の自警団所属のニシカ。
こんな感じに脳内に記憶し、四人の顔を見た。
その四人はと言えばなんとか彼の状況を理解してくれたようだ。
「言葉が話せない……か」
「一種の障害でしょうか？」

「う……」
肩を竦めて自分にも分からない事をアピールし、溜息をつく。
ふとレオナの方に顔を向けると手に持った袋に目がいった。
視線に気付いたレオナはその袋を彼に渡した。
「あの戦闘機から見つかった貴方の持ち物だ。　戦闘機に関してはうちの格納庫で管理しているよ」
袋の紐を緩め、中から全てを取り出す。
飛行服、飛行帽、ゴーグルに携帯食糧、そして写真が入っていた。
「護身用と思われる拳銃と散弾銃、そしてそれの弾薬も入っていた。　悪いがそれらはこちらで管理している」
銃に関しては別にこの状況では必要は無いと思うので別に構わない。
それに銃撃戦になったとしても重傷を負っている自分ではまともに戦えないのは明白だ。
荷物の中から一枚の写真を取り出し、じっと見つめる。
「その写真、コックピットの計器盤に貼り付けられていたが貴方の同僚か？」
写真の中にはパイロット姿の彼と、彼を取り囲む同じ格好の男達が取り囲むように並んでいた。

皆良い笑顔でカメラに向かって笑いかけていた。
中心に写っている彼もまた微笑んでいた。
今の自分は笑っていないが。
写真を見てから俯いてずっと動かない彼を不審に思い、エンマが声を掛けた。
「そんなに見つめて、その写真に何かありましたの？」
異変に気が付いたのはニシカが一番早かった。
それでも彼が涙を流していた事に気付くには少し時間が掛かったが。
「ど、どうした？」
彼は歯を噛み締めながら暫く涙を零し続けていたがやがて涙も収まり、患者服の袖で涙を拭った。
「……過去に何かあったみたいね……」
いつもはふざけているチカとキリエもこの時ばかりは空気を読んでか静かにその場に立っているだけだった。
涙に濡れた写真の裏にはこう書かれていた。
『１９３５、５、１１　Ｇｉｏｒｎｏ　ｄｅｌｌａ　ｇｌｏｒｉａ!!』
その意味を知るのは、今や彼しかいなかった。
◇◆◇◆◇◆◇

病院で目が覚めてからそれなりの日にちが経った。
その間に彼の乗っていた戦闘機がナツオ班長の手腕によって直ったり、この世界の文字を勉強したりと色々あった。
文字を覚えたお陰で何日も遅れてしまったが漸く自己紹介をする事が出来た。
そのぎこちない字を見て苦笑いしながら彼等は漸く自分の名を呼んだ。
「ファウストと言うのか、改めて宜しく頼む」
差し出されたその手をファウストはしっかりと握った。
レオナの手は女性にしてはがっしりとしていて力強い印象を与えられた。
それからまた数日経って遂に退院の日が来た。
ここに来た頃はあんなに死にかけていたのが今では病室の外を二本足で立って歩ける。
その喜びを静かに感じながら彼らと病院を後にした。
この後は酒場でファウストの退院祝いとコトブキ飛行隊への入隊祝いが同時で行われるそうだ。
澄んだ空を見上げながらこれからの事に少しばかり心を踊らせるファウスト。
「おーい何してんのー、置いてっちゃうよー！」
「あぁ」

◇◆◇◆◇◆◇

「「乾杯！」」

テーブルを囲んで食事をとる彼女達。

その中に一人混じる男。　彼がコトブキ飛行隊に新たに入隊する事になったファウストである。

「でもマダムよく入隊許してくれたよね！」

「マダム、ファウストは只者じゃない気がするとか言っていたな」

「ユーハング人というだけでも私は凄いと思いますわ」

「同感」

ファウストはマダム・ルゥルゥと既に病室で会っていた。

と言うよりルゥルゥの方からやって来た。

その頃にはまだイジツ語を習得出来ていなかったファウストをよそにトントン拍子に話が進み、ファウストをコトブキ飛行隊の隊員としてラハマに引き取る事になった。

文字を覚えた後にも一度、今度はコトブキ飛行隊のメンバーは抜きで来て話をしたり、色々と聞かれたので文字に書いて質問に答えた。

コトブキ飛行隊のメンバーはそれぞれ仕事があったので中々面会が出来ず、話す機会が少なかった。

なのでこの時間で質問攻めに会うのは目に見えていた。
「ねぇねぇ！ユーハングって海あるの？」
『ある』
「海ってすっごい大きいんでしょ？行ってみたいなぁ」
『自分の故郷は海がすぐ近くにあって幼少期は夏にはよく泳ぎに行っていた』
「毎日海で泳げるなんて羨ましいですわね」
「ユーハングには美味しい酒ってある～？」
『酒に関してはあまり知らないが確かワインが有名な街があった』
「ワイン？」
『飲んだことは無いが品のある味で金持ちが好んで飲んでいるそうだ』
「へ～」
「じゃあさ！パンケーキ美味しい所ってある!?」
『実家が飲食店を経営していて人気メニューの一つにパンケーキがある』
「ホント!?」
「はいはい！カレーは!?」
『カレーは確か無かったと思う』
「え～」

質問攻めのせいで手を休み無しに動かしたのでとても疲れた。
新しく買った手帳は革製のカバーに包んでいる。
レオナが金を出してくれたので有難く使わせてもらおう。
パーティも終わり、メンバーは全員解散した。
明日は自分も働く事になるので早めに寝よう。
そう思いながら自分の宿へと沈みゆく太陽を背に向かった。
◇◆◇◆◇◆◇
「輪に乱れ無し。　空間接続に異常ありません」
空中に現れる巨大な三つの輪。
それを眺める一人の軍服を身に纏った男。
機械によって制御された輪の大きさは直径５ｋｍを優に超え、不気味に揺れ動いていた。
その輪の下には夥しい数の飛行艦が待機していた。
「どうです？我が第１７飛行艦隊は」
男に隣に立っていた白衣を着た老人は顎髭を弄りながら答えた。
「壮観ですな。　しかし相手もこれ程の規模で来ると思うと恐ろしくて溜まりません」
「レッドランドは何としてでも手に入れなければなりません。　しかし安心してくださ

い。　我々は如何なる大戦にも対処しうる程の力を持っています」

飛行艦に描かれた赤い星が太陽に照らされて輝いていた。